山梨県南巨摩郡増穂町

平林大平遺跡

試掘調査概要報告

1991

増穂町教育委員会

序

増穂町は、甲府盆地の南に位置し、町の東を流れる富士川と、南アルプスの前衛をなす櫛形山に挟まれた利根川と戸川の複合扇状地に発展してきた町である。

町内には、原始、古代、中世の遺跡も多く中でも昭和60年に調査をはじめた権現堂遺跡からは、泥塔やそれを焼いた窯跡などが発見され、中世の仏教遺跡としては全国的にも貴重な遺跡の一つに数えられている。

今回の試掘調査を実施した大平遺跡は、標高約770ｍの平坦な山の尾根に広がっており、近くに湧水もあり、狩猟時代の人間が住むには好適地であったと思われる。

この遺跡は昭和37年の埋蔵文化財調査により確認された遺跡であるが、昭和47年にも再度調査が行われ、ここに遺跡があることがほぼ間違いないことが確認されていた。

しかし、昭和47年以降は、調査が行われていなかったため、今回増穂町遺跡調査会により、遺跡の範囲や、おおよその時代を特定するための試掘調査が行われた。

調査の結果、遺跡の範囲や時代、特徴等がほぼ解明された。さらにこの遺跡の詳しい内容については今後の調査が待たれるところである。

最後に、発掘調査から整理および報告書作成までの間、ご指導ご協力を賜わった関係機関各位に厚くお礼申し上げます。

増穂町長　田中隼人

例言

1　本書は山梨県南巨摩郡増穂町平林下河原に所在する平林遺跡の試掘調査概要報告書である。

2　調査は有楽開発株式会社のゴルフ場開発計画に先立ち遺跡の範囲確認を目的として実施された。

3　調査事業は増穂町教育委員会の委託を受け増穂町遺跡調査会が実施した。調査組織は別に示すとうりである。

4　発掘調査は瀬田正明が担当した。

5　本書の執筆は第１章を志村広文が、その他は瀬田が行い、瀬田が編集した。

6　出土品の実測・トレースは整理作業参加者佐野靖子・矢房静江が行った。

7　写真撮影は遺構・遺物とも瀬田が行った。

8　本書における出土品および写真・図面は増穂町教育委員会が保管している。

9　凡例

①縮尺は各挿図ごとに示してある。

②標高は海抜高を表す。

③方位は磁北を示している。

10　調査から報告書作成に至る過程で、次の方々や機関からご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

猪股喜彦　保坂康夫　宮沢公雄　平野修　櫛原功一　中山千恵　河西学　中込長徳　川角太　山梨県教育委員会文化課　山梨県埋蔵文化財センター　帝京大学山梨文化財研究所　増穂西小学校　平林生活改善センター

増穂町遺跡調査会組織

会　長　田中隼人　（増穂町長）

副会長　志村隆男　（増穂町助役）

　　長沢　徹　（増穂町教育長）

理　事　萩原三雄　　田代　孝

　　野中松男　　有泉　實

　　荘司存良　（以上学識経験者）

参　与　坂本美夫　（県文化課）

　　新津　健　（県埋蔵文化財センター）

監　事　渡辺宣治　（増穂町収入役）

　　名執美己男（町監査委員）

事務局　芦沢　勲　　志村広文

　　（以上増穂町教育委員会）

調査員　瀬田正明

発掘・整理作業参加者

深沢初枝・深沢昭恵・秋山かめ代・深沢美可子・深沢次子・秋山悦子・金子なかじ・深沢弘子・千塚久子・秋山よし子・深沢みゆき・秋山はるえ・手塚君恵・深沢美津留・保坂富子・保坂友江・保坂よしみ・秋山とよ子・手塚ゆい子・手塚松子・神田たき子・野田清子・堀内乙恵・秋山しげる・堀内妙子・中込教子・中込とし代・秋山雅子・手塚幸男・深沢常晴・佐野靖子・矢房静江

目次

序

例言

Ⅰ　調査にいたる経緯……1

Ⅱ　周辺の環境……2

Ⅲ　調査の方法と経過……7

Ⅳ　調査の成果

1　地形の特色と基本層序……8

2　遺構・遺物の出土状況……11

3　出土遺物

(1)縄文時代の遺物……15

(2)平安時代の遺物……16

Ⅴ　結語……19

挿図目次

第1図　平林大平遺跡周辺図

第2図　平林大平遺跡全体図

第3図　基本土層図

第4図　土層パターン概念図

第5図　土層パターン分布図

第6図　縄文時代遺構・遺物分布図

第7図　平安時代遺構・遺物分布図

第8図　縄文土器実測図

第9図　平安時代土器実測図

写真目次

写真1　遺跡近景

写真2　調査参加者

写真3　調査風景

写真4　7－d住居址

写真5　7－d遺物出土状況

写真6　2トレンチ住居址

写真7　6－c住居址

写真8　9－a遺物出土状況

写真9　35－b集石遺構

写真10　縄文土器1

写真11　縄文土器2

写真12　打製石斧

写真13　土偶

写真14　須恵器　蓋

写真15　土師器　杯

写真16　墨書土器1

写真17　墨書土器2

Ⅰ　調査にいたる経緯

近年、国民的余暇の増大によってリゾート地の開発が盛んになってきている。増穂町でも有楽開発株式会社によるゴルフ場の開発計画が町に提出された。その計画によると、おおむね119 haの土地に18ホールのコースと付帯施設が建設されることになる。そして、その予定地の中には平林大平遺跡が含まれることが判明した。

この地に遺跡が存在することは古くから知られており、昭和37年に作成された県下の埋蔵文化財分布調査台帳にも登録され、周知されていた。遺跡からは現在までに多くの遺物が表採されている。それらは縄文土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃・石匙・土偶・土師器などである。これらの遺物は遺跡が縄文時代中期および平安時代の複合遺跡であることを示しており、その範囲は南北250 m、東西300 mに及ぶとされていた。しかし、この遺跡を含む地域が農業基盤整備により、一部削平し埋土されて果樹園となったため地形が大幅に改変されてしまった。その後、現在に至るまで調査は行われていない。

このような状況の中でゴルフ場開発計画が町に提出された。町では教育委員会を中心として山梨県教育委員会文化課と有楽開発株式会社との協議を進め、開発計画の段階で適切な対応ができるよう遺跡の正確な範囲を把握することとなった。そのため町教育委員会では学識経験者からなる増穂町遺跡調査会を組織し、開発予定地地権者の協力をえて範囲確認のための試掘調査が行われることになった。以上の事前協議を経て、1990年５月16日から調査が開始された。

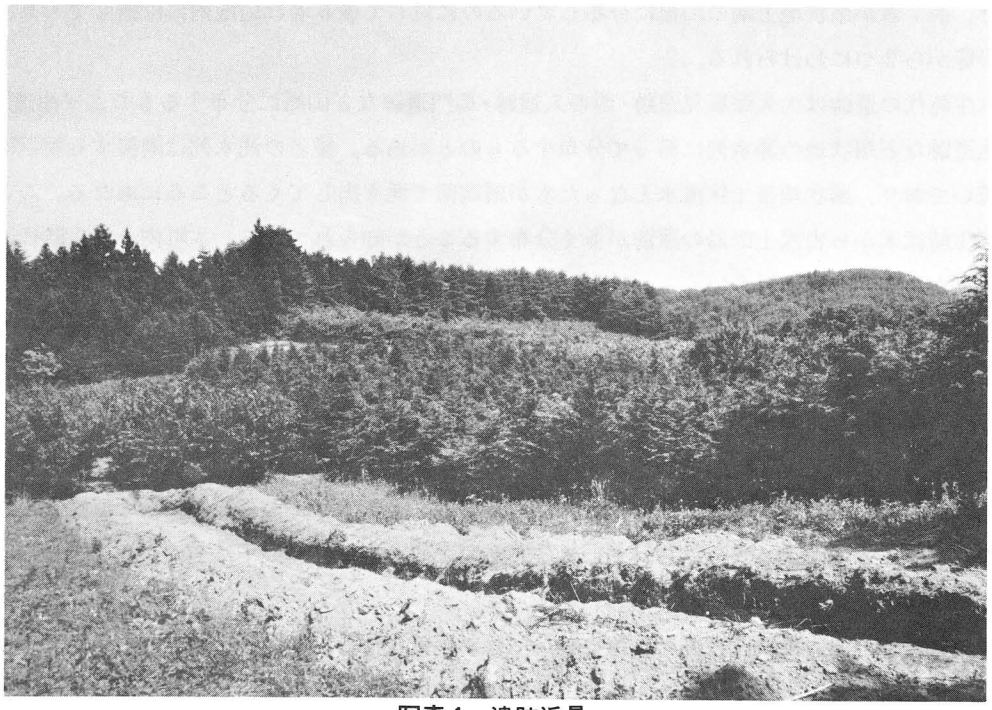


写真１　遺跡近景

II　周辺の環境

増穂町は甲府盆地の南端部に位置する。町の東側は戸川・利根川によって形成された扇状地で甲府盆地の一部をなし、西側は南アルプスの前衛である巨摩山脈とその直下の丘陵性山地とから成る。平林大平遺跡の所在する平林地区は町の西側山地内の集落である。集落の西側には櫛形町高尾から本町泊平を結ぶ南北線上に認められる断層崖の急斜面が生じている。集落はこの断層崖下にあり、櫛形山の北東斜面に発する利根川の谷頭盆地に立地している。遺跡は集落南西側の通称「八（鉢）の山」と呼ばれる丘陵性山地の東に広がる平坦面に立地し、標高は約720 m である。遺跡の北と東には利根川、南にはその支流である深沢が流れ、北と南は比高差80～100 m の崖、東は急斜面となっている。

『山梨県遺跡地名表』には増穂町内で32の遺跡が記載されている。もちろん、これは昭和54年の調査であるから現在までに新しい遺跡の発見もあり若干の増加があるだろう。『地名表』によると本町内では先土器時代の遺跡は確認されていない。『増穂町誌』では今回調査を行った平林大平遺跡で出土したこの時代に属すると考えられる石器が紹介されているが、形態的には縄文時代に属する可能性もあるという。また、今回の調査でもいくつかのトレンチでローム層を掘り下げてみたが、該期の遺物の出土はなかった。

縄文時代の遺跡は上平遺跡・北山遺跡・中尾田遺跡・平野遺跡・西の入遺跡・大堀田遺跡・馬門遺跡・向林遺跡・南平遺跡・大平遺跡・檜平遺跡・菖蒲池遺跡・下高下遺跡が知られている。時期的には檜平遺跡で前期から中期にかけての土器が出土している以外はいずれも中期である。また、前７者が扇状地上端の山裾に分布しているのに対して後６者は山地内に位置しており、占地形態から２つにわけられる。

弥生時代の遺跡は大久保広見遺跡・西の入遺跡・馬門遺跡など山裾に分布するものと平池遺跡・長池遺跡など扇状地の涌水列に沿って分布するものとがある。後者の涌水列は隣接する甲西町から続いており、扇状地帯で伏流水となった水が扇端部で涌き出してくるところにあたる。ここには弥生時代末から古式土師器の遺跡が多く分布することが知られている。本町内の弥生時代遺跡も後期から末期のものが多い。

本町の古墳は甲府盆地最南端の古墳として知られている。おもに春米地区と最勝寺地区の２ヶ所に分布してるが、『町誌』では大久保地区にも無名墳が１つあるとされている。これらのなかでその内容が判明しているものは少なく、春米の法華塚古墳で変形四獣鏡を含む仿製鏡２点と勾玉が、狐塚古墳で直刀が出土しているのが知られているだけである。この法華塚古墳は築造年代について意見がわかれているが、変形四獣鏡に朱が付着していることから５世紀代の竪穴系の埋葬施設を有する古墳であると考えられている。しかし、他の古墳については全く不明で今後の研究の進展が望まれる。

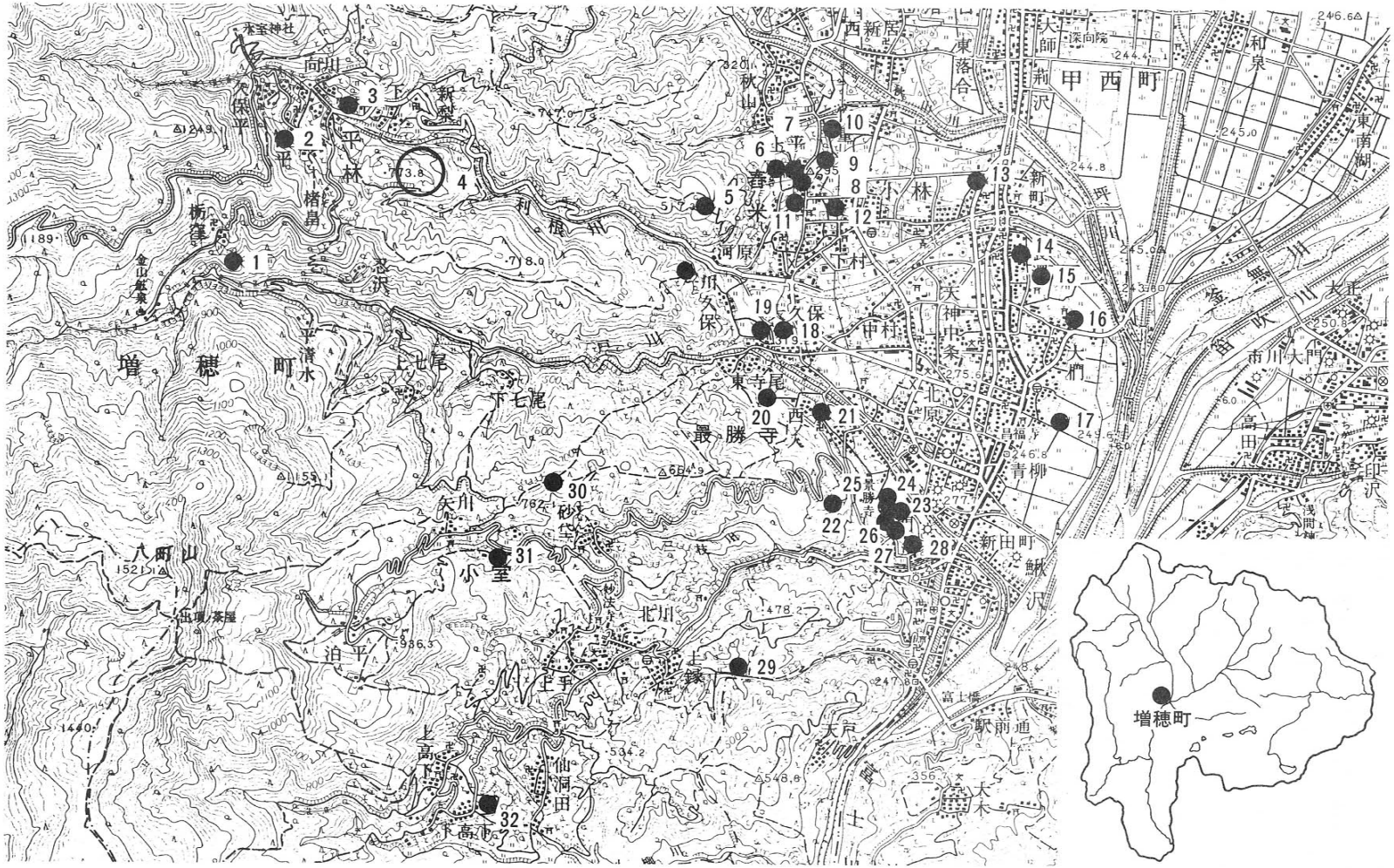
本町内における古墳時代以降の集落については不明確な部分が多い。表採される土師器の細片が時期決定困難なことが多いためである。その中で内容がある程度判明している遺跡として檜平遺跡と大平遺跡とがある。両遺跡は山地内に位置し、土師器・須恵器が多く出土して平安時代に

位置付けられる。その他に上平遺跡で平安時代後半の土師器が出土していることが知られている。通説では本町は櫛形町・甲西町・鰍沢町とあわせて『和名抄』巨摩郡九郷のうち大井郷に比定されている。扇状地部の集落遺跡が弥生時代以降どのように展開したのか今後の究明が待たれる。現在、扇状地上には遺跡があまり多く見られないが、同様な状況を呈していた櫛形町では詳細分布調査を行った結果、扇状地上にも多くの遺跡が発見され、古墳時代以降多くの遺跡が進出していることがわかった。このような点からも本町内において遺跡の詳細分布調査を行う必要があるだろう。

春米の権現堂遺跡は平安時代後期の泥塔焼成遺構が発見された仏教遺跡である。この遺跡は明王寺の寺域内に位置する。明王寺の創立は天平神護年間と伝えられている。増穂町にはこの明王寺以外にも最勝寺・妙法寺といった古寺がある。平林地区にある氷室神社はかつては鷹尾寺といい、明王寺の別院であったと伝えられる。『甲斐国志』によると開山は宝亀年間、儀丹上人によるとされ、僧弁尊が願主となって降三世明王の彫刻を施した建仁3年(1203)銘の懸仏があるという。明治初年の神仏分離によって氷室神社となっているが、昭和になって周辺から鏡像と独鈷杵が出土している。

番号	遺跡名	時代区分	番号	遺跡名	遺跡区分
1	平林栃窪遺跡	平安	18	大久保広見遺跡	弥生・古墳
2	平林南平遺跡	平安	19	春米中尾田遺跡	縄文・弥生
3	平林向林遺跡	縄文	20	最勝寺平野遺跡	縄文・弥生・古墳
4	平林大平遺跡	縄文・平安	21	最勝寺西の入遺跡	縄文・弥生・古墳
5	藤塚古墳	古墳	22	最勝寺大堀田遺跡	縄文・弥生・古墳
6	狐塚古墳	古墳	23	塚穴古墳	古墳
7	春米北山遺跡	縄文・弥生	24	鎌塚古墳	古墳
8	春米上平遺跡		25	無名墳	古墳
9	法華塚古墳	古墳	26	大塚古墳	古墳
10	小林竹重遺跡	弥生・古墳	27	無名墳	古墳
11	塚穴古墳	古墳	28	最勝寺馬門古墳	古墳
12	二十三夜塚古墳	古墳	19	小室下土録古墳	古墳
13	安清の池遺跡	弥生・古墳	30	菖蒲池遺跡	縄文・弥生・平安
14	長沢平池遺跡	弥生・古墳	31	小室桧平遺跡	縄文・平安
15	長沢長池遺跡	弥生・古墳	32	下高下遺跡	縄文
16	大椚遺跡	弥生・古墳	33	権現堂遺跡	平安
17	青柳遺跡	弥生・古墳			

表1　増穂町内遺跡地名表



第１図　平林大平遺跡周辺図

第２図　試掘坑配置図

III　調査の方法と経過

調査は大平遺跡の範囲と性格を把握することを目的とした。そのため遺跡として周知されている範囲を対象として、その中にトレンチを入れて遺構・遺物の有無を確認した。調査対象地の地目は大半がスモモ畑で一部りんご畑などが含まれている。試掘坑はこれらの耕作状況に対応して設定した。調査対象地域内には植林地帯が含まれているが、今回の調査の対象からは除いた。

調査は5月16日より準備を開始した。現場は多くの場所で下草が繁茂していたのでトレンチを設定する場所について下草刈りを行った。それと併行して地権者との協議を重ねてトレンチを設定していった。

5月21日より発掘を開始する。調査は北側より開始した。22日には重機を用いて41・43トレンチをはじめとした大きなトレンチの表土はぎをおこなった。

北側の調査終了後、23日には西側の調査を56・57トレンチから開始した。その後、南からか調査を展開していき、25日には12－ａで最初の平安時代住居址を確認した。これ以後、中央の道路付近に住居址が確認されていき、5月31日には7－ｄで縄文時代の住居址を確認した。

東側については6月4日より調査を開始した。まず17－ａを中心として東西及び南北にトレンチを延ばし地形・土層の状況を確認した。まず17－ａでは平安時代の遺物包含層の下に暗褐色土が堆積していることが確認された。また22－ａ～28－ａでは谷を埋めており、それに対して29－ａより東が削平されていることがわかった。この結果を踏まえて削平部についてはトレンチを省略していくことになった。東側では33－ａをはじめとした谷の西で平安時代の住居址が多く発見された。谷の部分については客土が厚く、2ｍ以上に達するところもあるため旧表土まで掘り下げることが出来なかったトレンチもある。

11日には大平遺跡について町遺跡調査会を開いて協議し、現地視察を行った。また18日には増穂西小学校の児童が見学に訪れた。この頃になると調査は最終段階になり、遺物が出土しているが遺構の明確でないトレンチを再精査し、第2トレンチなどで住居址を確認した。

18日より埋め戻しを開始した。21日には測量・埋め戻しが終わり、現地調査を終了した。

写真2　調査参加者

写真3　調査風景

IV、調査の成果

1、地形の特徴と基本層序

本遺跡は八の山の東側平坦地に位置し、標高は約720ｍである。遺跡の立地する平坦地は西側では八の山東斜面、南側では深沢、北から東では利根川へ落ちる急斜面によって画され、ほぼ三角形状を呈している。全体的には東北東を向いた緩斜面である。北端には東側へ開口する浅谷がある。また、東南部には南側へ開口する谷があり、平坦地中央部は浅谷形を呈している。浅谷は南端で現状では４～５ｍの段差で落ちたこみ、さらに深沢へむかって急激に落ちている。しかし、この部分は近年の開墾によって高い部分を削平して埋めており、かつて谷が奥まで深く入り込んでいたことがわかっている。以上のような地形の特徴を踏まえてつぎに基本層序を見てみたい。

基本層序は17－ａトレンチの南北セクションを図示した。最下層のローム層を含めて７層に分けることができる。（第３図）

第０層　客土

第Ⅰ層　灰褐色土層　　粘性・しまりともになく、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。

第Ⅱ層　暗灰褐色土層　　粘性・しまりともになく、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。

第Ⅲ層　黒褐色土層　　粘性・しまりともになく、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。

第Ⅳ層　茶褐色ローム質土層　　粘性強い。炭化物粒子・焼土粒子を多く含む。

第Ⅴ層　暗茶褐色土層　　粘性・しまりともになく、挟雑物は少ない。

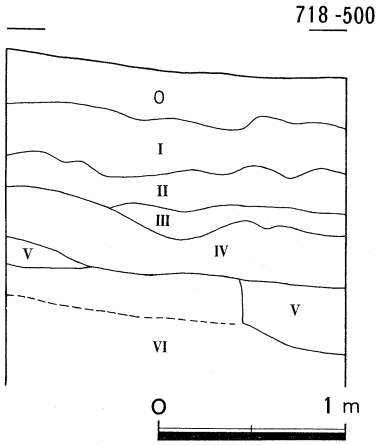
第Ⅵ層　茶褐色ローム層　　粘性・しまりともに強い。

このうち第Ⅰ層から第Ⅳ層にかけて平安時代を中心とした遺物が多く出土し、第Ⅳ層に住居址が掘り込まれている例が多く観察される。また４－ａトレンチでは第Ⅳ層までに平安時代の遺物が、第Ⅴ層に縄文時代の遺物が出土している。17－ａトレンチでも第Ⅵ層に時期不明のピットが掘り込まれており、二つの文化層として認識できる。この17－ａのパターンを基本として各トレンチの土層堆積状況は９つに大別できる。（第４図）

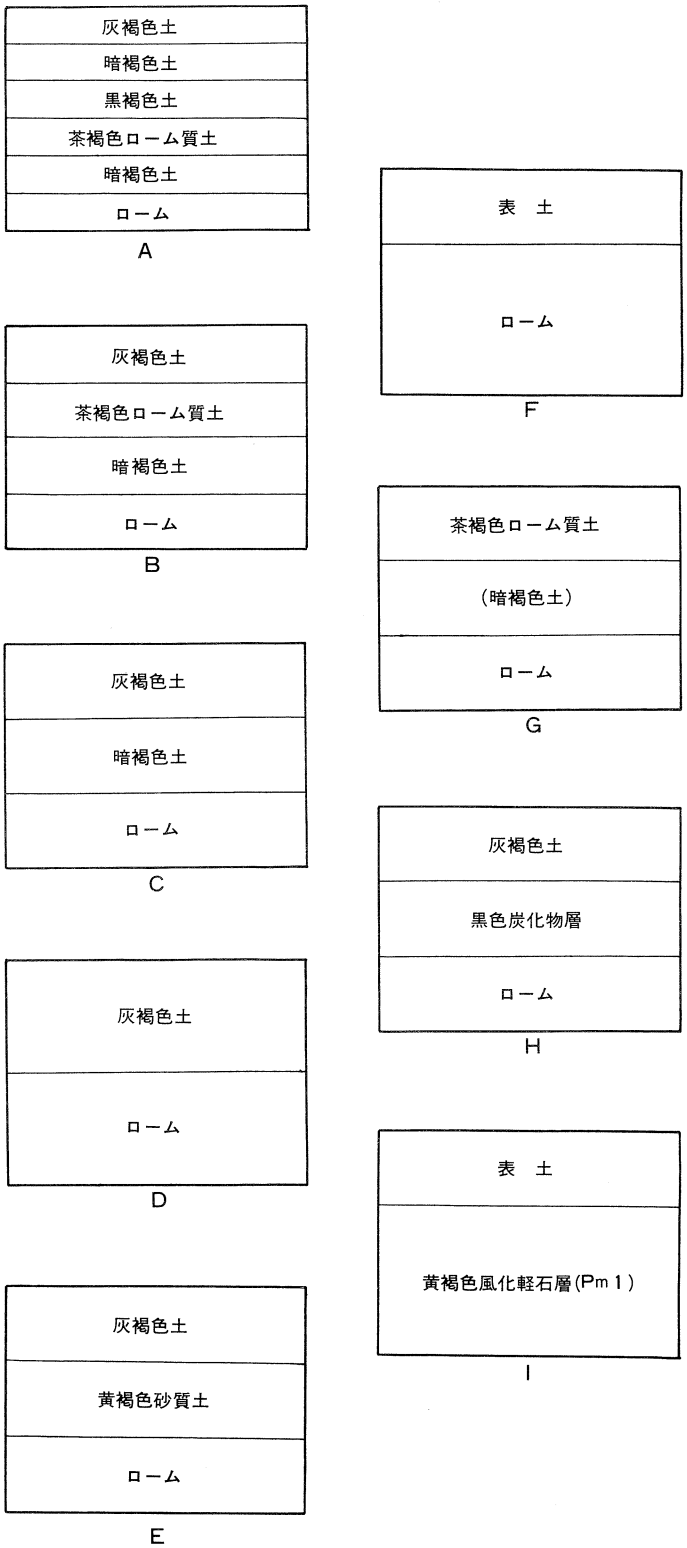
Ａ　上層から灰褐色土層、暗褐色土層、黒褐色土層、茶褐色ローム質土層、暗茶褐色土層、ローム層が堆積している。17－ａでみられたのと同じパターンである。なお第Ⅲ層黒褐色土層が見られないものもここでは基本的に同じと考えて一括した。

Ｂ　上層から灰褐色土層、茶褐色ローム質土層、暗褐色土層、ローム層が堆積している。基本層序から第Ⅱ・Ⅲ層が欠けている。Ａと同様に茶褐色ローム質土層が間層のように堆積している。

Ｃ　上層から灰褐色土層、暗褐色土層、ローム層が堆積している。基本層序から第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層が欠けている。



第３図　基本土層図



第4図　土層パターン概念図

D　上層から灰褐色土層、ローム層が堆積している。基本層序から第II・III・IV・V層が欠けている。

E　上層から灰褐色土層、黄褐色粗砂層、ローム層が堆積している。Dに黄褐色粗砂層が間層としてはいったものと考えられる。この黄褐色粗砂層はローム層が風化したものと考えられる。

F　ローム層が露呈してるもの、あるいは数cmの表土の直下にローム層が堆積しているもの。

G　上面にロームが表土化した茶褐色土が堆積し、その下にローム層があるもの。

H　上層から灰褐色土層、黒色炭化物層、ローム層が堆積しているもの。調査地北側の谷部にだけ見られる。斜面上方に炭窯のような遺構が存在する可能性が高いが、遺物・遺構の検出はなかった。

I　黄褐色風化軽石層（Pm－1）が露呈しているか、客土の直下に埋積しているもの。

この9つは更に客土の有無によって二つに分けることができる。

9つのパターンのうちIは近年の削平が確実に行われており、またFのうちのいくつかもこの削平が行われている可能性がある。そこでこのF・Iタイプと客土の分布によって削平の範囲が確定できる。客土は大きく二つの分布が見られる。ひとつは西地区の主に南半部に見られ一部は東地区に及ん

でいる。もうひとつは東地区のほぼ中央部から南側に見られる。それに対してＩパターンは西側地区の南西側と東地区の南側と東から北にかけて平坦面の縁辺部の３ヶ所に見られる。位置的な関係から見て西地区西南部を削平して西地区の南半部を埋め、東地区の南と東から北にかけての縁辺部を削平して東地区の中央部を埋めたものと考えられる。西地区の西側にはＬ字状の段が作られているが、この客土によって作ったものである。このような地形の改変から南西側の斜面が今よりもきつく、また東地区中央部の谷が深く、東端の高まりがより高かったといえるだろう。

次に土層パターンの分布状態について考えてみたい(第５図)。まず、Ｆパターンがほぼ３ヶ所に分布しているのがわかる。これらは先述した削平の行われた部分に隣接しており、比較的高い位置に広がっている。Ｇパターンはそのｆパターンに隣接しており、地目が畑であるため表土化が進んだものと考えられる。浅谷の部分にＡ～Ｄのパターンが分布し、特にＡ・Ｂパターンの所が低く凹地となっていたものと考えられる。この二つのパターンは中間に茶褐色ローム質土層を挟んでおり、17－ａの例でもわかるように縄文時代と平安時代の文化層がわけられている。したがって、縄文時代から平安時代に至る間に地山であるローム層のが崩落して浅谷部に堆積したものと考えられる。縄文時代と平安時代とではこのように浅谷部をめぐって地形環境が大きく変化していることが土層堆積状況の観察からわかった。このことは両時代の遺跡の在り方にも大きく影響を与えていると考えられる。

第５図　土層パターン分布図

2、検出された遺構と遺物の出土状況

今回の調査では縄文時代住居址３軒、平安時代住居址20軒、時期不明土坑５基、溝状遺構１、ピット２、集石遺構１が検出された。

縄文時代住居址は第２トレンチ、５－ｃトレンチ、７－ｄトレンチで確認した。いずれも住居址の一部を確認しただけであり、炉址の検出をもって住居址と認識した。

第２トレンチでは幅２ｍ、長さ35ｍのトレンチのほぼ中央で炉址が検出された。茶褐色ローム層に掘り込まれている。覆土が茶褐色を呈するためプランが明瞭ではないが、東西６ｍ程度の円形を呈するものと考えられる。炉址は石囲い炉で北と南東部に石が残存し、南側には25 cm×40 cm の平石が置かれている。遺物は縄文土器・打製石斧が出土した。（写真６）

５－ｃトレンチではトレンチの南東コーナーで炉址の一部と考えられる石が検出され、周囲をボーリングした結果、トレンチ外に石が続いている状況が確認されたので住居址と判断した。プランは不明である。

７－ｄトレンチでは南西コーナーで炉址が検出された。プランは不明である。炉址は石囲い炉で東側に50cm×65cm の平石を置いている。炉址の北西側には隣接して正位置の埋甕がある。遺物は縄文土器が３個体出土し、いずれも中期後半曽利式に位置付けられる。（写真４-５）

平安時代住居址は第２トレンチ、６－ｃトレンチ、６－ｉトレンチ、９－ａトレンチ、10－ａトレンチ、11－ｂ・ｄトレンチ、13－ａトレンチ、17－ｂトレンチ、18－ａ・ｂトレンチ、19－ａトレンチ、20－ａトレンチ、24－ｅトレンチ、33－ａ・ｃ・ｄトレンチ、34－ａトレンチ、35－ｆトレンチで確認した。総計20軒であるが、６－ｃでは焼土が２ヶ所で確認されたためカマドないしは住居址が２つ存在する可能性がある。これらのうちカマドと考えられる焼土を検出したものは２トレ、６－ｃ、６－ｉ、11－ｄ、13－ａ，17－ｂ、19－ａ、20－ａ、33－ａ・ｃ・ｄ、35－ｆ、その他は壁の一部をプランあるいはセクション面に現れた立ち上がりとして確認した。いずれも部分的

写真４　７-d 住居址

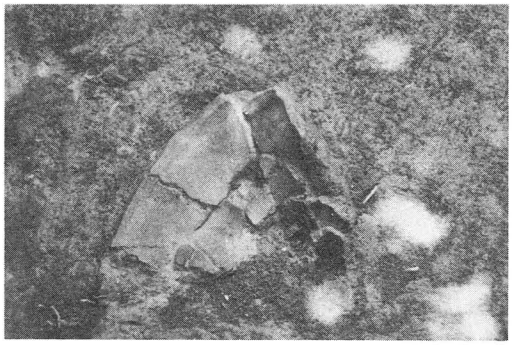


写真５　７-d　遺物出土状況

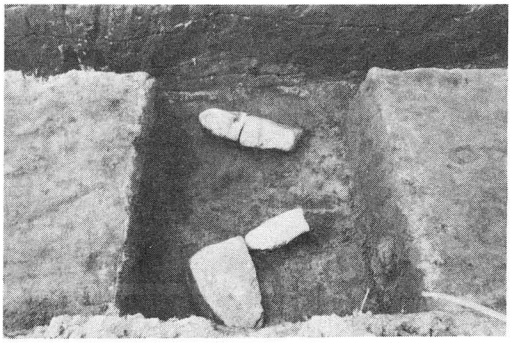


写真６　２トレンチ住居址

な確認であるため規模は不明である。また、カマドの方向は東壁のものが多く、西壁のものものがあるが、規模同様不明な部分が多い。遺構の検出されたトレンチの土層パターンはA～Gの各パターンがあるが、A・Bパターンのトレンチでは第5層に、それ以外は第6層に掘り込まれている。遺物は破片が多く、土師器杯・甕、須恵器甕などが出土している。

その他の遺構としては土坑・集石遺構・ピットが検出されている。

土坑は1トレで2基、4－c・e、43トレで確認した。1トレの2基が楕円形プランを呈するが他の3基は円形を呈する。43トレの土坑は2×21mトレンチの南端で検出されている。いずれも遺物の出土がないため時期は不明である。

集石遺構は35－bで検出した。西側に80×40cmの偏平な石を2段に積んで区画し、その中に礫を配しているが、検出した範囲では規則性は見られなかった。遺物は礫の上面から縄文土器・土師器がいずれも破片で出土しているが、流れ込みの可能性があり時期の決定は出来ない。(写真9)

ピットは9－e、17－aで検出されている。いずれも遺物の出土はない。

土坑・集石遺構・ピットはいずれも第6層に掘り込まれている。特に17－aは土層堆積状況がAパターンであり、平安時代包含層の下層に掘り込まれているため時期が注目される。

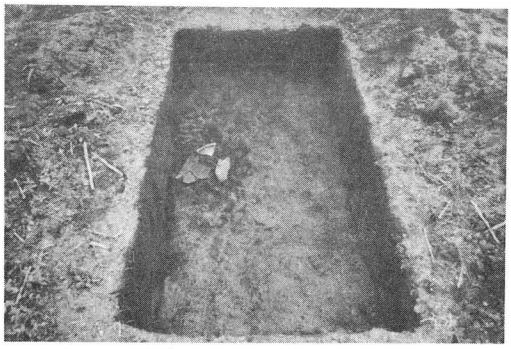


写真7　6-c 住居址

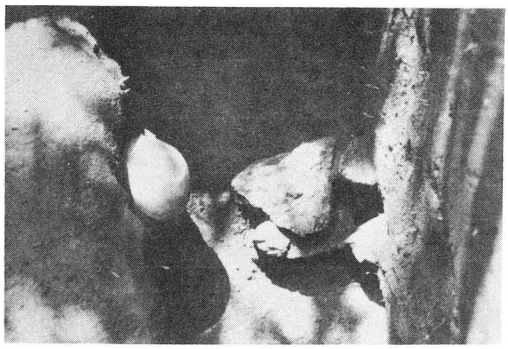


写真8　9-a 遺物出土状況

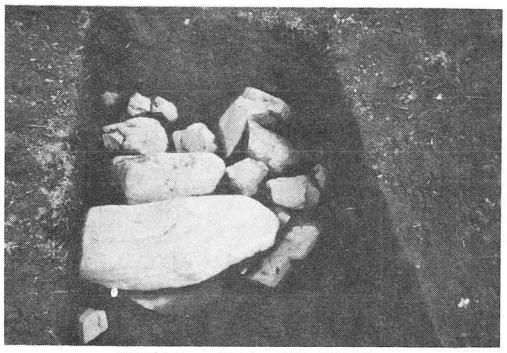
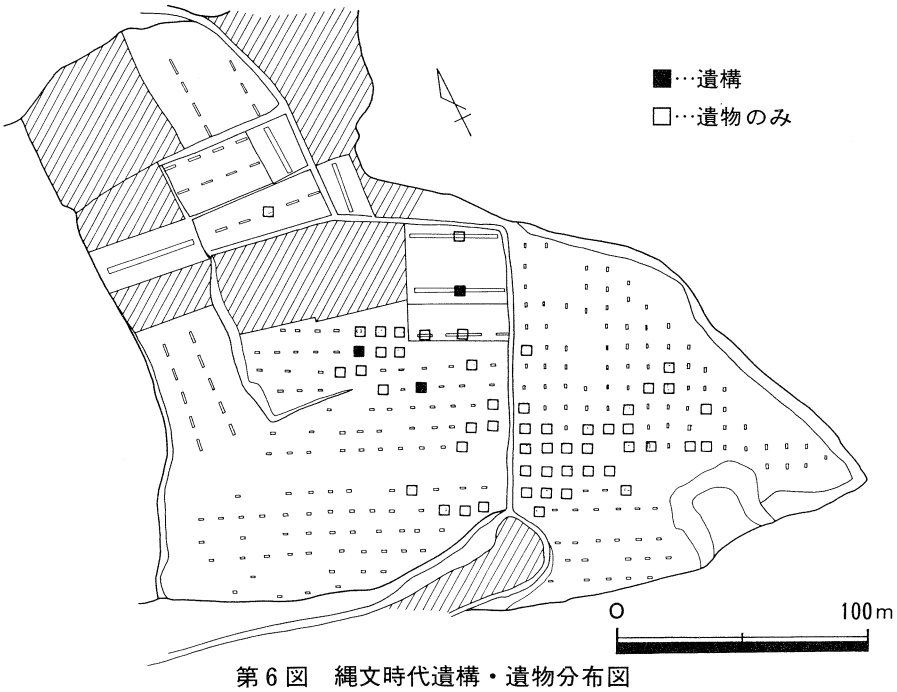


写真9　35-b 集石遺構

次に縄文時代・平安時代の遺物出土状況について考えてみたい。いずれも図6・7に示した。これらは遺物が一点でも出土したトレンチをドットとして落としたものであり、遺跡の範囲を示すものとして理解したい。縄文時代遺物の出土分布は主に3つに分けられる。ひとつは3－b・cを中心とした地域で、この部分には住居址が3軒検出されており縄文時代集落の中心がここにあったものと考えたい。つぎは17－aを中心とした地域で、この部分では住居址が検出されていない。地形的に先の地域より低い位置にあるため遺物が流れ込んだ可能性が高い。しかし、17－aで下層にピットが検出されたように平安時代包含層の下に縄文時代の包含層が存在する可能性も否定できない。最後は25－aより東の地域である。この地域は客土が厚く谷の部分を埋めていると考えられている。遺物はその客土中から出土している。この地域の客土は谷の北と東の高い

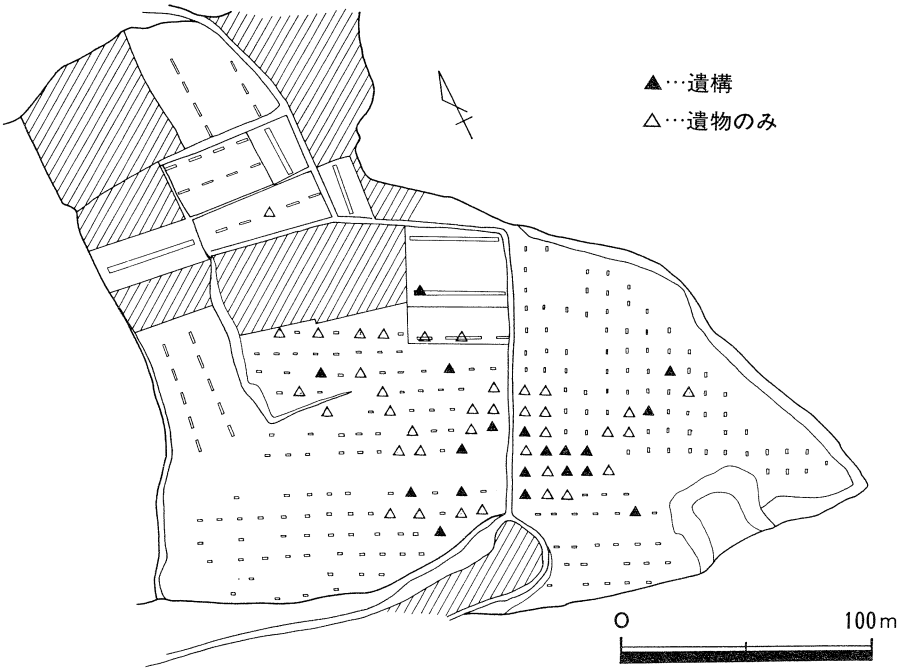


第6図　縄文時代遺構・遺物分布図

部分を削平して盛土したものと考えられ、客土中の遺物はその際に入ったものであろう。従って谷の北・東側には縄文時代の遺跡が存在していたが削平によって壊滅してしまったものと考えられる。

次に平安時代遺物の出土状況について考えてみたい。縄文時代同様に3つの地域にわけられる。ひとつは17－aを中心とした地域で住居址14軒を検出しており平安時代集落の中心地域であると言いえる。これに対して北西側の6－cを含んだ地域では住居址が3～4軒と散在しており、先の地域と同一集落の中ではあるが異なった空間利用がされていたものと考えられる。最後の地域は24－eを中心とした小さな地域で、住居址が1軒検出されている。この地域は最初の地域とは谷を挟んで対じした形となっている。谷の部分は旧表土まで掘ることができたトレンチが少ないため不明な部分が多いが、このような状況からなんらかの利用を想定することも可能だろう。また谷部の客土中からは平安時代の遺物の出土はあまりなく、削平された部分に平安時代遺跡があった可能性は低い。

また、50－cで両時代の遺物が出土している。これより北では遺物の出土がないため、先述した43トレンチの時期不明土坑とともに遺跡の北限を示すものであろう。50－cのすぐ南は今回調査することができなかったが、遺跡の続いている可能性は高い。遺跡南西の斜面部と南側では両時代とも遺物・遺構の検出はなかった。遺跡は中央の浅谷部を中心とし、縄文時代の集落については東側のやや高い部分にまで展開していたものと考えられる。両時代の集落を比較すると縄文時代の集落は北側のやや高い部分に、それに対して平安時代の集落は南側の低い部分で涌水を中



第7図　平安時代遺構・遺物分布図

心に展開している。これは縄文時代にまだ浅谷部が深かったためでもあるが、両時代の占地形態が異なっていることを示すとも考えられる。

3．出土遺物

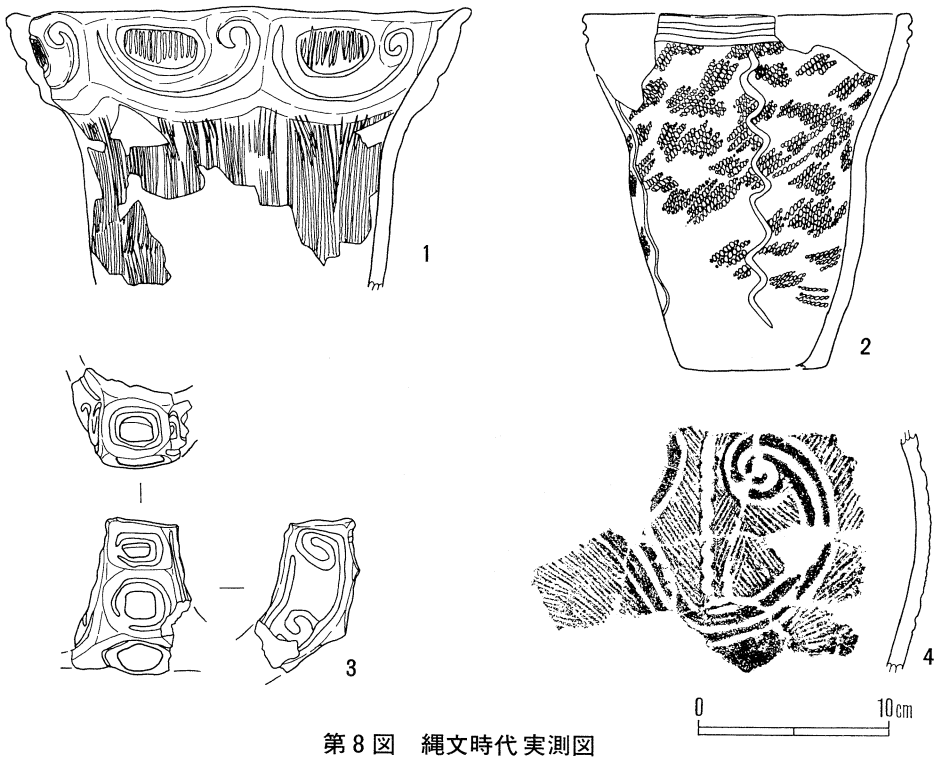
(1)縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は縄文土器、打製石斧が出土した。

縄文土器　（図８－１～４）　図示したものはいずれも深鉢である。１（写真10)は口縁及び体部の破片である。条線文を地文とし口縁部は楕円区画文とＳ字文を組み合わせている。２(写真11)は縄文を地文とし、口縁部に２条の平行沈線、体部には蛇行沈線文が施される。１と２はともに７－ｄ住居址出土。３は把手の破片である。同心円文を基本とし、側面に渦文のつなぎが沈線で施される。３－ｂ・ｃ出土。４は体部破片である。条線文を地文とし沈線による渦巻文と幅広の蛇行沈線文が施される。２トレンチ住居址出土。これらはいずれも中期後半曾利式に位置付けられる。縄文土器はこの他にも多く破片が出土している。大半は図示した土器同様曾利式に属するが、早期鵜ヶ島台式、中期前半から中葉の五領ヶ台式、新道式、狢沢式、藤内式が少数出土している。

打製石斧　（写真12）　打製石斧は３点出土している。３は基部を欠くが、１・２は完形で刃部が基部より幅広の撥状を呈する。１は２トレンチ、２は23－ｄ、３は34－ｃ出土。

土偶　（写真13）　中込長徳氏によって表採された土偶である。下半身を欠く。両手を大きく開いた形をしており、中期後半に位置付けられる。



第８図　縄文時代 実測図

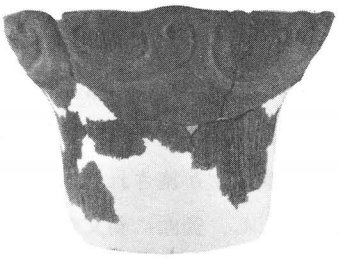


写真10　縄文土器１

写真11　縄文土器２

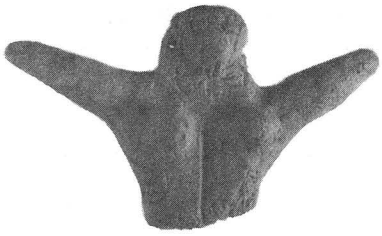


写真12　土　偶

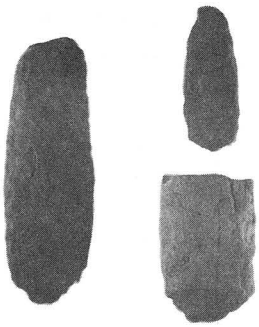


写真13　打製石斧

（２）平安時代の遺物（第９図）

平安時代の遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器が出土している。

須恵器

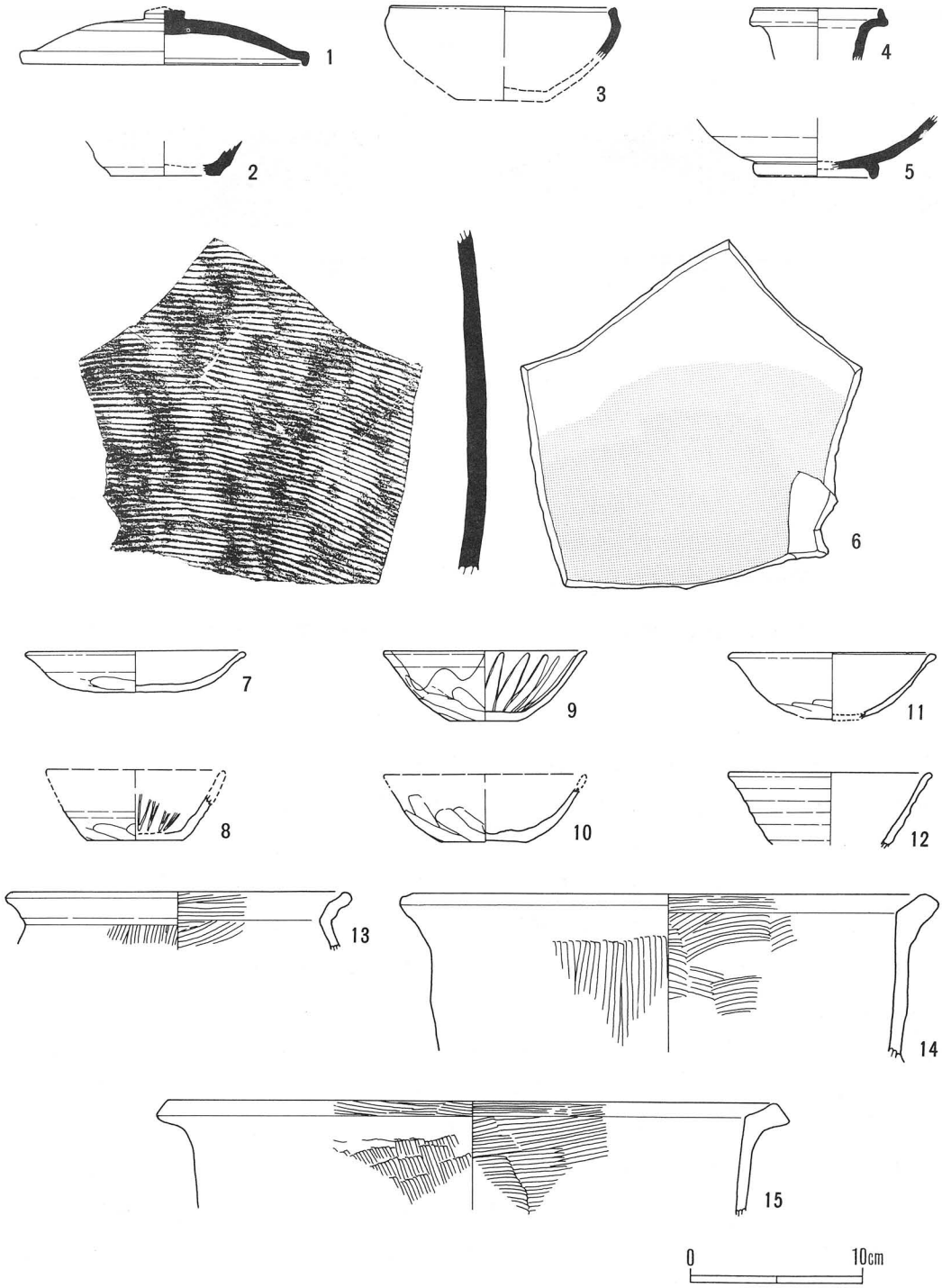
蓋　（１．写真14）　一部欠けているが偏平なつまみをもつ蓋であり、口縁部は一度外側へ開いた後屈曲して端部をなす。口径16.7 cm、高さは推定で3.4 cm。内面及び口縁部外面にはロクロナデ、天井部には右方向の回転ヘラ削りを施す。色調は青灰色だが、内外面とも口縁部付近に自然釉付着して暗青灰色を呈しており、重ね焼きの痕跡を残している。17－ａ出土。

杯　（２）　底部破片である。底部外面にはヘラ削りが施される。底径6.4 cm。色調は青灰色を呈する。26－ａ出土。

鉢　（３）　小型の鉢の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部が内傾する面をなす。口径13.2 cm。色調は青灰色を呈し、外面に自然釉が付着している。19－ａ出土。

壺　（４）　長頸壺の口縁部破片である。口縁部は外側へ開いた後、上方へ向かって屈曲している。内外面ともロクロナデが施される。口径7.2 cm。色調は胎土が灰色を呈するが、内外面とも暗緑色の自然釉が付着している。18－ａ出土。

甕　（６）　甕の体部破片である。外面には平行叩き、内面には横方向のヘラ削りが施される。色調は青灰色を呈する。内面の一部が磨かれ、墨痕がかすかに見られることから硯として転用された可能性もある。20－ａ住居址出土。



第９図　平安時代土器実測図

土師器

皿　（７）　　口縁部は緩やかに開き、端部がわずかに外反する。底部外面に手持ちヘラ削り、口縁部内外面にロクロナデが施される。口径12.6 cm、底径7.6 cm、高さ2.4 cm。色調は黒褐色を呈する。６－ｂ出土。

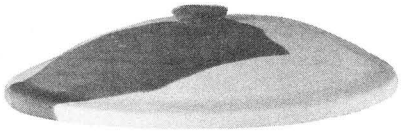


写真14 須恵器 蓋

写真15 土師器 杯

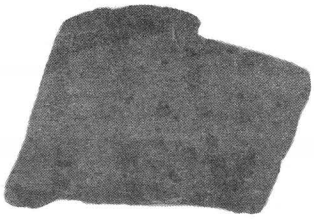


写真16 墨書土器 1

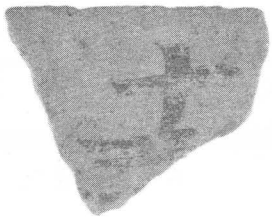


写真17 墨書土器 2

杯 （8～12） 8は底部破片である。口縁部は直線的に開いている。内面には放射状暗文が施される。底径5.6 cm。33－b出土。9～11は口縁部が内湾して開き、11は端部が肥厚して玉縁状をなす。9（写真15）の内面には花弁状暗文が施される。9は口径11.8 cm、底径4.2 cm、高さ4.1 cm、9－a住居址出土。10は底径5.1 cm、3－b～c出土。11は口径11.6 cm、6－d住居址出土。以上はいずれも底部及び口縁部下半にヘラ削りが施され、色調は橙色を呈する。12は内黒の杯で内面下半に放射状暗文、上半に横方向のヘラ磨きが施され、色調は黄褐色を呈する。口径11.6 cm。17－a出土。

甕 （13～15） 図示したのはいずれも口縁部破片である。13は口縁部が内面に鋭い稜をなして外反している。15は口縁部が肥厚して端部が幅広の面をなし、14はさらに口縁部外面下端に粘土を充塡して補強している。いずれも内面には横方向、外面には縦方向のハケ目、口縁部外面には横ナデを施し、色調は茶褐色を呈する。13は口径19.8 cm、33－a出土。14は口径30.2 cm、6－b出土。15は口径35.7 cm、6－d住居址出土。なお、甕にはこの他に厚手で黄褐色を呈する体部破片が出土しているが、図示するには至らなかった。

墨書土器（写真16•17） 墨書土器は5点出土しているが、判読できたのは次の2点である。16は土師器皿の底部破片である。文字は外面に書かれており、則天文字の「万」であると考えられる。10－d出土。17は杯の口縁部破片である。文字は外面に複数書かれているが、一番上の「土‥」だけが読める。8－b出土。

V　結語

平林大平遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡である。今回の調査の結果、両時代の遺跡の範囲と性格の一端が明らかとなった。ここでは成果をまとめ、今後検討すべき問題点を挙げておきたい。

遺跡の範囲は従来言われていたよりも狭く、また多くの部分が削平されていることがわかった。遺構の集中する場所は34－ａと２トレンチの周辺に限られるが、その間にも遺物のみが出土している場所があり、その部分を含めて今後の開発計画の中で十分対処していくべきであろう。

次に縄文・平安両時代の遺跡についてまとめてみたい。

縄文時代の遺構は中期後半曽利式の土器を出土した住居址が３軒、３－ｂ・ｃ付近に集中して検出された。しかし、遺跡中央に走る浅谷の北・東側の削平部分にも縄文時代の遺構が広がっていた可能性がある。浅谷部は縄文時代にはさらに深く、その北側は北西から南東に連なるやや狭い平坦面をなしていたのであろう。この平坦面に縄文時代中期後半の集落が展開していたと推定される。本遺跡を含めて平林地区には縄文時代中期の遺跡として向林・南平の２遺跡がある。一定地域における遺跡群の相互関係については以前から研究されてきたテーマであるが、今回の調査によって集落の立地がわかったので、今後はこの立地に規定された集落の形態や生業活動を明らかにして、この地域における集団関係について検討していくことが課題となろう。

また、甲府盆地における中期以降の縄文時代集落のあり方を櫛原功一氏は「中期連続型」「中期前半型」「中期後半型」「後期前半型」に大別している(註１)が本遺跡はこのうち「中期後半型」に相当する。氏は同文中で「中期前半型」が盆地東南部に、「中期後半型」が盆地西北部の八ヶ岳南麗地域に多い傾向を指摘している。本遺跡を含む盆地西部ではまだ調査実例が少ないが、櫛形町の上の山、〆木遺跡はいずれも「中期前半型」である。しかし同町で行った分布調査では縄文時代の遺物の大半が中期後半に属するものであったということで、先の二地域のうち八ヶ岳南麗地域との関係が今後注目されよう。

平安時代の住居址は縄文時代とは対象的に浅谷部に集中して検出され、それより北の部分には散在していることがわかった。両者の間には遺構が検出されなかった部分があるが、住居址以外の遺構、掘立柱建物址などが存在する可能性もある。出土遺物の年代は９世紀後半から11世紀前半に位置付けられる。

近年、山梨県内では大規模な開発に伴い多くの奈良・平安時代遺跡が調査されている。その結果、国府・国分寺の置かれた峡東地方では古墳時代以来連綿と継続する集落が多いのに対して八ヶ岳南麗地方では９世紀後半代になって新たに設けられた集落が多いことが明らかになってきた。こうした八ヶ岳南麗の遺跡群はその成立が計画的なものであり、牧の設置や承知２年（835）の親王賜田と関連が指摘されている(註２)。本遺跡の近辺の奈良・平安時代集落遺跡としては櫛形町〆木遺跡があり、８世紀末から11世紀初頭まで集落が営まれている。この〆木遺跡のありかたは八ヶ岳南麗の遺跡群とは異なった様相を示している。それに対して本遺跡の存続した年代は南麗の遺跡群とほぼ一致している。本遺跡は山地内に立地しており、平地部の集落とはありかたが異な

ると予想される。本遺跡のありかたは9世紀後半における新規集落の発生背景の一端を示す可能性があり、集落構成や生業など多方面からの検討がなされる必要があろう。また、巨摩郡域では8世紀後半から10世紀前半にかけてロクロ整形の土師器甕が存在する。(註3) しかし、本遺跡から出土した甕は甲斐型が圧倒的に多く、在来型の破片が2点、ロクロ整形のものはなかった。今回の調査が断片的なものとは言え、今後注目していくべき点だろう。

増穂町域は通説では『和名抄』記載の巨摩郡大井郷に比定されるが、異説もある。この問題を含めて峡西・峡南地域ではまだ調査事例が少ないため、奈良・平安時代の様相についても不明な点が多い。本遺跡の調査によってその一端が明らかになることを期待したい。

註1　櫛原功一　1989　「縄文時代の住居形態と集落」『山梨考古学論集』II

註2　萩原三雄　1986　「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』I

　　猪股喜彦　1985　「山梨県における奈良・平安時代の集落遺跡」『月刊　歴史手帖』13－1

　　岡本範之　1990　「平安期における甲斐国巨摩郡の動向」『山梨県考古学協会誌』3

註3　保坂康夫　1988　「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』2

参考文献

増穂町誌編纂委員会　1977　『増穂町誌』

山梨県教育委員会　1979　『山梨県遺跡地名表』

増穂町教育委員会　1989　『権現堂遺跡』

櫛形町教育委員会　1987　『〆木遺跡』

　　1990　『町内遺跡詳細分布調査報告書』

トレンチNo.	規模(m)	土層のパターン	埋土	ローム層までの深さ	包含層までの深さ	遺構	遺物	備考
1	2×	G		40		土坑(時期不明)	縄文土器 土師器	
2	2×	G		40		住居址(縄文・平安)	縄文土器 石器 土師器	
3－a	1×5	D		40				
3－b～c	1×15	B		64	50	住居址(平安)	縄文土器 土師器	
3－d	1×5	B		77			縄文土器 土師器	
4－a	1×2	A		70			縄文土器	
4－b	1×2	C		36			縄文土器 土師器	
4－c	1×2	C		64		土坑(時期不明)	縄文土器 土師器 火鉢	
4－d	1×2	B		69				
4－e	1×2	B		50		土坑(時期不明)	土師器	
4－f	1×2	D		47				
4－g	1×2	D		50			土師器	
5－a	1×2	A		72				
5－b	1×2	C		50			縄文土器	
5－c	1×2	D		40		住居址(縄文)		
5－d	1×2	C		45				
5－e	1×2	C		50				
5－f	1×2	D		36				
5－g	1×2	C		41				
5－h	1×2	D		30				
6－a	1×2	D		30				
6－b	1×2	D		30			縄文土器	
6－c	1×2	D		32		住居址(平安)	土師器	
6－d	1×2	D					土師器	
6－e	1×2	D		33				
6－f	1×2	C		36				
6－g	1×2	C		49			縄文土器 土師器	
6－h	1×2	C		47		溝状遺構(時期不明)	縄文土器	
6－i	1×2	C		53		住居址(平安)	土師器 灰釉陶器	
6－j	1×2	C		42				
6－k	1×2	C		39				
7－a	1×2						土師器	
7－b	1×2	D		46				
7－c	1×2	D		30				
7－d	1×2	D	○	72		住居址(縄文)	縄文土器	
7－e	1×2	D	○	40				
7－f	1×2	D	○	59			縄文土器 土師器	
7－g	1×2	D		53				
7－h	1×2	C		36			土師器	
7－i	1×2	C		40				
8－a	1×2	A		80			縄文土器 土師器	
8－b	1×2	C		55			土師器	
8－c	1×2	D		30				
8－d	1×2	D	○	32				
8－e	1×2	D	○	39				
8－f	1×2	B	○	88			土師器 刀子	
8－g	1×2	B	○	90				
8－h	1×2	C	○	114			土師器	
9－a	1×2	D	○	99		住居址(平安)	土師器	
9－b	1×2	D	○	35			縄文土器 土師器	
9－c	1×2	D	○	35				
9－d	1×2	D	○	52			陶器	
9－e	1×2	B	○	54		ピット(時期不明)	土師器	
9－f	1×2	D	○	84				
9－g	1×2	C	○	70				
9－h	1×2	C	○	84				
9－i	1×2	C	○	70				
9－j	1×2	D	○	28				
10－a	1×2	C	○	74		住居址(平安)	須恵器 土師器 灰釉	
10－b	1×2	C	○	56				
10－c	1×2	A		80			縄文土器 土師器	
10－d	1×2	C	○	68			土師器	

表2　　トレンチ一覧表(1)

トレンチNo.	規模(m)	土層のパターン	埋土	ローム層までの深さ	包含層までの深さ	遺構	遺物	備考
10－e	1×2	D	○	48				
10－f	1×2	D	○	25				
10－g	1×2	D	○	41			陶器	
10－h	1×2	D	○	37				
10－i	1×2	F		14				
10－j	1×2	F		5				
11－a	1×2	E	○	88				
11－b	1×2	D	○	32		住居址(平安)	土師器	
11－c	1×2	E	○	82				
11－d	1×2	A		80		住居址(平安)	縄文土器 土師器	
11－e	1×2	F		10				
11－f	1×2	F	○	29				
14－g	1×2	F		12				
14－h	1×2	F		0				
14－i	1×2	F		0				
14－j	1×2	I	○	16				
15－a	1×2	F	○	51				
15－b	1×2	F	○	64				
15－c	1×2	F	○	52				
15－d	1×2	F		0				
16－a	1×2		○					未掘 58cmまで
16－b	1×2	F	○	66				
16－c	1×2		○					未掘 38cmまで
16－d	1×2	F		0				
17－a	1×2	A	○	150	80	ピット(時期不明)	縄文 土師 須恵 灰釉	
17－b	1×2	B	○		50	住居址(平安)	縄文 土師器 須恵器	
17－c	1×2	D	○	60			縄文土師器須恵器	
17－d	1×2	C		50			土師器	
17－e	1×2	F		10				
17－d	1×2	D		30			縄文土器	
17－f	1×2	F		10				
17－g	1×2	F		10				
17－h	1×2	F		10				
17－i	1×2	F		10				
17－j	1×2	F		15				
17－k	1×2	F		10				
18－a	1×2	B	○		50	住居址(平安)	縄文 土師 須恵 灰釉	
18－b	1×2	D		30			縄文 土師 須恵 砥石	
18－c	1×2	D	○	50			土師器 須恵器	
18－d	1×2	C		36			土師器 須恵器	
18－e	1×2	F		10				
18－f	1×2	F		17				
18－g	1×2	F		8				
18－h	1×2	F		9				
18－i								欠番
18－j								欠番
18－k	1×2	F		0				
19－a	1×2	A		－		住居址(平安)	縄文 土師器 須恵器	
19－b	1×2	F		27				
19－c	1×2	D		40				
19－d	1×2	F		20				
19－e	1×2	F		15				
19－f	1×2	F		17				
19－g								欠番
19－h	1×2	F		10				
20－a	1×2	B	○	－	80	住居址(平安)	縄文 土師器 須恵器	
20－b	1×2	D	○	30			縄文土器	
20－e								欠番
20－f								欠番
20－g								欠番
20－h	1×2	F		0				
20－i	1×2	F		0				

表2　トレンチ一覧表(2)

トレンチNo.	規模(m)	土層のパターン	埋土	ローム層までの深さ	包含層までの深さ	遺構	遺物	備考
20－j	1×2	I	○	24				
21－a								未掘
21－b	1×2	E	○	90		溝状遺構(時期不明)	縄文土器 土師器	
21－c								未掘
21－d	1×2	F		30				
21－e	1×2	F		14				
21－f	1×2	F		13				
21－g	1×2	F		13				
21－h	1×2	F		13				
21－i	1×2	F		10				
21－j	1×2	I	○	－				
22－a	1×2		○				縄文土器	130cmまで埋土
22－b	1×2		○	－			縄文土器 土師器	未完掘
22－c	1×2	E	○	150		住居址(平安)	縄文土器 土師器	
22－d	1×2	F	○	37				
22－e	1×2	F		0				
22－f	1×2	F		0				
22－g	1×2	F	○	10				
22－h	1×2	I	○	－				18
22－i	1×2	I	○	－				16
23－a	1×2		○	－			縄文土器	146
23－b	1×2		○	－				140
23－c	1×2	D	○	140				
23－d	1×2	D	○	70			打製石斧	
23－e	1×2	F		0				
23－f	1×2	F		0				
23－g	1×2	F		10				
23－h	1×2	I	○					28
24－a	1×2		○					158
24－b								未完掘
24－c	1×2	D	○	152				
24－d	1×2	D	○	126			縄文土器	
24－e	1×2	D	○	50		住居址(平安)	縄文土器 土師器	
24－f	1×2	F		0				
24－g	1×2	I	○	10				
25－a	1×2		○				縄文土器	110
25－b	1×2		○					130
25－c	1×2	D	○					
25－d	1×2	D	○	70			土師器	
25－e	1×2	F	○	15				
25－f	1×2	I	○					10
26－a	1×2		○				縄文土器	153
26－b								欠番
26－c	1×2	E	○	58			縄文土器	
26－d	1×2	I	○					58
26－e	1×2	I	○					31
27－a	1×2	E	○	88				
27－b	1×2	F	○	24				
27－c	1×2	I	○					42
27－d	1×2	I	○					43
28－a	1×2	F	○	19				
28－b	1×2	I	○					50
29－a	1×2	I	○					14
29－b	1×2	I	○					39
30－a	1×2	I	○					14
30－b	1×2	I	○					30
31－a	1×2	F		0				
31－b	1×2	I	○					13
32－a	1×2	I	○					12
33－a	1×2	A	○	－	106	住居址(平安)	縄文土師器 須恵器	
33－b	1×2	A	○	－	95		縄文土師器 須恵器	
33－c	1×2	A	○		90	住居址(平安)	縄文土師器 須恵器	

表2　　トレンチ一覧表(3)

トレンチNo.	規模(m)	土層のパターン	埋土	ローム層までの深さ	包含層までの深さ	遺構	遺物	備考
33－d	1×2	A	○		100	住居址(平安)	縄文 土師 須恵 灰釉	
33－e	1×2	A	○		136		縄文土器 土師器	
34－a	1×2	D	○	60		住居址(平安)	縄文土器 土師器	
34－b	1×2	D	○	47		集石遺構(時期不明)	縄文 土師器 須恵器	
34－c	1×2	D	44				縄文 土師 打製石斧	
34－e	1×2	D		30				
34－f	1×2	D	○	113			縄文土器	
35－a	1×2	D		20			縄文土器	
35－b	1×2	F		19				
35－c	1×2	F		11				
35－d	1×2	F		15				
35－e	1×2	F		8				
35－f	1×2	F		20		住居址(平安)	土師器	
35－g	1×2	○					未完掘	
36－a	1×2	F		0				
36－b	1×2	F		14				
36－c	1×2	F		14				
36－d	1×2	I						15
36－e	1×2	I						17
36－f	1×2		○					未完掘
37－a	1×2	F		0				
37－b	1×2	F		0				
37－c								欠番
37－d	1×2	I						21
37－e	1×2	F		0				
37－f	1×2		○					未完掘
38－a	1×2	F		0				
38－b								欠番
38－c	1×2	F		0				
38－d	1×2	I						20
38－e	1×2	I						11
38－f	1×2		○					未完掘
41	2×	D		42		土坑(時期不明)		
43	2×	D		50				
44－a	1×5	F		0				
44－b	1×5	H		40				
44－c	1×5	H		93				
45－a	1×5	F		0				
45－b	1×5	F		0				
45－c	1×5	H		96				
45－d	1×5	H		39				
46－a	1×5	C		42				
46－b	1×5	C		40				
46－c	1×5	D		30				
46－d	1×5	D		23				
47－a	1×5	A		70				
47－b	1×5	C		65				
47－c	1×5	C		57				
47－d	1×5	C		43				
49	2×	C		50				
50－a	1×5	C		76				
50－b	1×5	A		82				
50－c	1×5	A		130			縄文土器 土師器	
50－d	1×5	A	―	59				
50－e	1×5	C		46				
56－a	1×5	C		54				
56－b	1×5		○					未完掘
56－c	1×5	C	○	140				
56－d	1×5	C	○	121				
56－e	1×5		○					未完掘
57－a	1×5	I		0				

表2　　トレンチ一覧表(4)

トレンチNo.	規模（m）	土層のパターン	埋土	ローム層までの深さ	包含層までの深さ	遺構	遺物	備考
57－b	1×5	F		0				
57－c	1×5	C	○	125				
57－d	1×5		○					未完掘
57－e	1×5	C	○	95				
58	1×5	C	○	190				

表２　　トレンチ一覧表(5)

山梨県南巨摩郡増穂町
平林大平遺跡　―試掘調査概要報告―
平成３年３月30日　　発行
編集　増穂町遺跡調査会
発行　増穂町教育委員会
印刷　デザインオフィス WITH